

2020/10/14

(うと Q 世話し お互いの為に)

昨日のスタッフ面接の折、浮かぬ顔の弊社英訳担当のパキ姉ちゃんが

「主人が、いい仕事が見つければカナダか英国に移住したいっていうの。テレワークで日本人上司 (Japanese boss) から、昼休みと言わず夜と言わずのべつ幕なしに電話やメッセージが、送られてきて、プロジェクトリーダーの主人が近ごろ鬱っぼいの。それでイライラして私たちにあたるから、当然自分や子供も何となく鬱っぼくなってくるし」

と家族の危機を訴えてきました。

「でも、私はこの会社をとてめ気に入っているから、出来る事なら一緒にカナダか英国に移住して向こうで新しくビジネス始めない？」

とも。

「みんなもそうっているわ。仕事のやり方、日本語、来ます、来ますって言って全然来ないとか。自分たちには全然わからないって。

確かに生活はとても便利だし安全ではあるんだけど、風習や習慣が余りにも「特異 (abnormal)」過ぎて住み辛いからって」

それを聞いて、今の我が国で起きている、就労外国人受け入れの「問題の縮図」を全て見られたような気がしました。

いや、就労外国人ばかりか、我が国国民にさえ、上述の問題は当てはまる気もしました。

曰く

「On と off との不分明、タダでさえ語彙数が多すぎて複雑な言語の上に、更に載せられた裏読み、深読み、行間を読む、以心伝心、腹芸などのコミュニケーション疎外要員の数々。それができないと「KY」と呼ばれ、益々恐怖に陥り、結果、来ます、来ますと言って来ない (或いは怖くて来られなくなる) 事態に陥っているのではないのかな？」

と。

一体何がそれ等の問題を生起させているのか？

今はまだ、自分には分かりません。

しかし、今、ぼんやりとながらも自分に想像がつくのは、

「このままでは、我が国は早晩、衰退し、世界地図から消えてしまうだろうな」

という事です。

どうすれば「このまま」を変えることが出来るのか？

もちろん今、そんなことの答えは持ち合わせてはおりません。

しかし、それでも

「パキ姉ちゃん、安心しろ。これから俺が全力で、この難問を解いてみせるから。とりあえずお前たち家族はまだ、我が国に残っているよな」

ホスト国のホスト会社のホスト「シャチュ (社長)」としては、そういうしかありませんでした。

いや。

これはもう、見つけるしかありません。

お互いの為に。